SOCIAL ART LAB
FACULTY OF DESIGN KYUSHU UNIVERSITY

九州大学

大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

大学から文化力
POWER OF CULTURE

文化庁

九州北部豪雨災害復興支援団体紹介小冊子“かたり”

九州北部豪雨災害 復興支援団体小冊子“かたり”編集部



九州北部豪雨災害をこえて
人々は何を思って集い、
語りあってきたのか。

九州北部豪雨災害
復興支援団体紹介小冊子
“かたり”

九州北部豪雨災害 復興支援団体小冊子“かたり”編集部

九州北部豪雨災害（2017年）をこえて、被災地ではいま、復旧活動に加え、「生活再建」や「まちづくり」が重要になっています。そこで、この小冊子は特に「創造」に関わる活動を中心に紹介しています。

彼らは大規模災害を前にして、何を考え、どう行動したのか。災害の後、刻々と変化する状況に対応しながら、問題を少しでも軽減するために創意工夫を重ね、実行する支援者たち。豪雨災害がすべての地域にとっての可能性になったいま、彼らの思考や行動は、災害を乗り越えるためのヒントであり、教訓であり、「未来への提言」なのです。

この小冊子は、九州大学ソーシャルアートラボ 復興支援部を中心に、九州大学の学生、一般社会人の有志によって結成された「九州北部豪雨復興支援団体小冊子 “かたり” 編集部」によって作成されています。現場を訪れ、聞き取り調査を行い、それぞれ心を込めて紙面を作りました。

この冊子を手にとった地域外の方々には、現在の被災地のニーズを知り、「支援したい気持ちを行動に結びつける」きっかけにしてほしいです。また、被災地の方々には、相互理解と連携のネットワークづくりに役立てていただければ幸いです。さらに、可能性としての被災地である全ての地域における「防災意識の継続と深化」を期待します。

小冊子タイトルの “かたり” とは、「語る」と「かたる（“参加する” という方言）」の意味を重ねています。この小冊子を通じて、被災地の福岡県朝倉市、東峰村（朝倉郡）、添田町（田川郡）と、地域外の方々の意識がつながり、支え合いの輪が広がることを願います。

九州大学 芸術工学研究院
知足 美加子
ともたり みかこ

目次

九州北部豪雨災害（2017 年 7 月 5 日）の概要 03

朝倉市広域
- 共星の里 黒川 INN美術館 + 九州大学ソーシャルアートラボ「黒川復興ガーデンとバイオアート」 05
- 里川径一「あさくら観光協会、朝倉ウッドキャンドル」 09
- 隈部敏明「朝倉市役所 商工観光課」 11
- 櫻木和弘「三連水車の里あさくら」 13
- 天野茂晃「朝倉青年会議所」 15

高木地区
- 林利則・秀子「子供の農業体験受け入れ」 17
- 師岡知弘「高木薪づくりプロジェクト、黒川みらい会議」 19
- 柏田智「黒川復興プロジェクト」/ 鳥巣良彦「農業家」 21
- 「宮園たんぽぽの会」/ 笹栗浩明「蛍雪の里 黒川山荘」 23
- 岩佐憲一郎・伊藤リカ「JRVC チーム 螢火」 25

杷木周辺
- 望月文「一般社団法人 Camp」 27
- 髙良寛「アグリガーデンスクール＆アカデミー福岡 朝倉校」 29
- 塚原健児「東林田ラバーズ (Lover’s)」 31
- 杉岡世邦「杉岡製材所 、SUGITALO」 33
- 小川進・一瀬徹夫「松末復興かわら版編集チーム」 35
- 松本亜樹「あさ・くる」 37

東峰村
- 岸本晃「東峰テレビ」 39

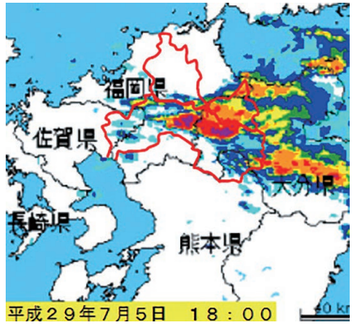
添田町
- 加藤憲司・川畑裕己「英彦山 地域デザイン LLP」 41

九州大学
- 三谷泰浩「九州大学災害復興支援団」 43
- 尾方義人「朝倉復興支援あさくら杉おきあがりこぼし展」 45
- 知足美加子「流木再生プロジェクト（彫刻）」 47

九州北部豪雨災害（2017年7月5日）の概要

線状降雨帯による豪雨

2017年７月５日から、対馬海峡付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響等により、「線状降水帯」が形成・維持され、同じ場所に猛烈な雨を継続して降らせたことから、九州北部地方で記録的な大雨となりました。24時間雨量が 829mm、そのうち９時間に774mmの降雨があり、これまでの観測記録を更新する大雨となりました。朝倉市黒川の雨量観測所では、７月５日から７日の期間総雨量 894mm、1 時間の雨量として129mm/h を記録しています。



2017.7.11 ／黒川地区（撮影：柳和暢）



2017.7.26 ／寺内ダム



2017.7.22 ／東林田地区



2017.7.22 ／山林崩壊箇所



被害の概要

九州北部豪雨は、一定の地域に集中して、莫大な降雨が持続したことが特徴です。山地崩壊により約 1065 万㎥の土砂と、約 21 万㎥の流木が発生しました。特に災害がひどかった赤谷川では、大規模な浸食と谷の崩壊に伴う土砂によって壊滅的な被害を受けました。福岡県朝倉市、東峰村（朝倉郡）、添田町（田川郡）、および大分県日田市は、政府より激甚災害指定されています。

この記録的な大雨により、福岡県、大分県の両県では、死者行方不明者 42 名の人的被害がありました。加えて、水道、電気等のライフラインの他、道路や鉄道、地域の基幹産業である農林業にも甚大な被害が生じました。また、発災直後には2,000名を超える方々が避難生活を送ることになりました。住宅被害は全壊 275 件、半壊 831 件、床上床下浸水 616 件。道路損壊・埋没 640 件。がけ崩れは 220 件発生しています。これらの被害総額は約1,941億円に及びました[1]。

(1)福岡県庁「平成29年7月九州北部豪雨における災害対応に関する検証結果報告書」
https://www.bousai.pref.fukuoka.jp/spc/images/H29hokubugouu.pdf（2019年7月20日確認）

土砂と流木

九州北部豪雨災害被災地は、真砂土（まさど）と呼ばれる地質が多く分布しており、大量の水を含むと流れやすい性質があるため、豪雨によって表層崩壊が多く引き起こされ、苛烈な土砂災害に繋がったと考えられます。大量の土砂と流木が、山間部谷筋の中小河川に流れ込み、谷底平野に洪水が発生しました。

復旧に伴う土砂の撤去量は206万㎥にのぼりますが、そのうち撤去されたのは157万㎥（2019年３月時点）。農地などに大量の土砂が堆積したままになっています。流木の 95%は撤去され、そのうち 96.7%がバイオマス施設などで再利用されました。ただ、山間部などには 6,000t の流木が残っているとみられています[2]。

これらの土砂災害に伴い、地域の生活基盤である果樹等の農地の復旧、流木の再利用などが、九州北部豪雨災害の復興を考える際の起点になることが多いのです。

(2)日本経済新聞（夕刊）7月2日（伊藤仁士記者）

2017.7.22 ／ 松末地区



2017.7.26 ／流木集積所（旧朝倉農業高校）





心を癒す“庭”の共創
黒川復興ガーデンとバイオアート

共星の里 黒川INN美術館 + 九州大学ソーシャルアートラボ

2017.7.26



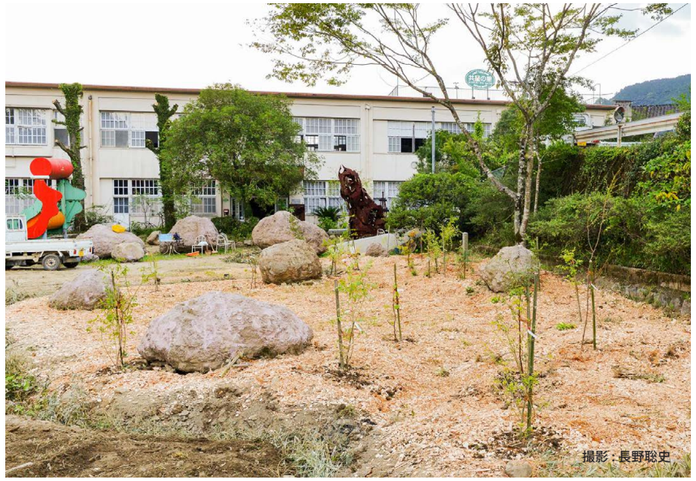
2018.10.26



2018.11.10



ワークショップ / 黒川復興ガーデンとバイオアート（2019.9.11~12）





柳和暢さん



尾藤悦子さん



共星の里と豪雨災害

朝倉市黒川にある「共星の里 黒川INN美術館」（2000年～）は、閉校となった旧黒川小学校をリニューアルした美術館です。豊かな自然環境の中で、現代アート作品展示、ワークショップ開催など、柳和暢さんや尾藤悦子さんを中心に先進的な文化発信を行ってきました。

この地域の豪雨災害は甚大で、共星の里にも、おびただしい土石流が押し寄せました。道路が寸断されたこともあり、1年間以上の休館を強いられる中、共星の里を大切に思うアーティスト等が復旧に尽力しました。

九州大学ソーシャルアートラボは、アートの力で復興を目指す共星の里を支援すべく、「黒川復興ガーデンとバイオアート－英彦山修験道と禅に習う」プロジェクトに取り組むことになりました。この取り組みは、共星の里の野外スペースに流れ着いた岩を活かしながら、いのちあるものの循環を再生させ、心安らぐ復興ガーデンを創造するものです。

風と水と土の道・再生のための庭づくり

庭は数年の時間をかけ、一般市民と共に企画・制作しています。「人間が心の力を出し合い共同で何かを創造することは、尊厳を回復し前を向く契機となる」まず、地域内外の方々と考えあわせることで、意識が「場」に永続的につながることを目指す現地研修や企画ワークショップを行いました（2018年）。

次に、野外スペースの生態系を再生させるため、流木や廃材による消し炭作りを用いて土壌改良し、植樹を行いました。（2019年）。さらに流木を再活用し、庭を眺めるための東屋（あずまや）を建てています。杉材は、手刻み・手鉋の木組みで組み立てられました。川石を拾い土間に敷き詰め、三和土（たたき）で仕上げられています。この黒川庭園の中で、学生たちが、メディアアートなど様々な表現活動を行っています（2020年）。

黒川は英彦山修験道文化圏に属し、室町時代より英彦山座主院を大切に守ってきた地域です。自然を崇敬する修験道および禅に習いながら、これからも心のいのちが輝く仕組みを共に創造していこうと思います。歴史文化や自然、人の心を、アートを軸に交差させ復興をめざす共星の里の姿は、「星」のように導く光を投げかけてくれるのです。

私たちができること
復興の庭で、心を癒すお茶会やアートイベントを開催する。

私たちがのぞむこと
共星の里はすべての人に開かれている場所。ぜひ足を運んでほしい。

共星の里 黒川INN美術館

廃校利用の美術館。国内外のアート作品を展示し、ワークショップ等を行う。自然の中の体感型アートスペース。

［住所］福岡県朝倉市黒川1546-1
［電話番号］0946-29-0590
［E-mail］kyousei@tj9.so-net.ne.jp
［Web］www.kyouseinosato.jimdo.com

九州大学ソーシャルアートラボ

社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出すアートの研究・教育・実践・提言を行う九州大学のプロジェクト。

［住所］福岡県福岡市南区塩原4-9-1
［電話番号］092-553-4552
［E-mail］sal-cul@design.kyushu-u.ac.jp
［Web］http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp

「黒川復興ガーデンとバイオアート－英彦山修験道と禅に習う」プロジェクト

2020.3.5»3.6

東屋セルフビルドと植栽ワークショップ

共星の里野外スペースに、被災木を再活用した東屋「泰庵（たいあん）」が建てられた 。杉材は、釘を使わずに、手刻み・手鉋の木組みで組み立てられた。川石を拾い土間に敷き詰め、石灰とにがり、赤土による三和土（たたき）で仕上げた。屋根を打つ木槌と、土間の石を叩きしめる音が、いつの間にか同期していく。その響きによって環境と人の心が繋がり、調和していく様は、実に美しかった。











黒川復興ガーデン

2019.12.28

黒川アートパフォーマンス（メディアアート）

復興支援に関わった九州大学の学生たちは、黒川地区の環境、人の優しさ、食べ物の美味しさに感動したという。彼らは地域の方々のために、災害からの復興を表現するアートパフォーマンスを行う企画を立てた。巨石群や生き残ったイチョウをプロジェクションマッピング（空間に映像を投影し視覚効果を与える技術）等で舞台要素とする計画である。「夢みたいにきれいだったよ」という感想に、学生たちの方が涙を流す場面もあった。

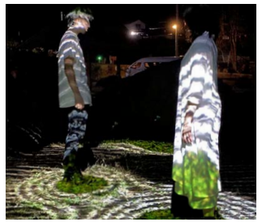


アートパフォーマンス「共生（ともいき）」／口羽雅晴

2020.10.11

アートパフォーマンス 共生（ともいき）

コロナ禍の中、九州大学学生による無観客公演・デジタル枯山水「調身・調息・調心」（密岡稜大）とアートパフォーマンス「共生（ともいき）」（口羽雅晴）が行われた。（この映像は後日、ライブ配信で地域内外の方々と鑑賞）前者は、黒川庭園の巨石を活かしながら、枯山水をデジタル的に表現している。静かにたたずむと周囲に水文がひろがるというインタラクション（相互作用）がある。後者は、豪雨災害前の日常、災害の苦しみ、そこからの再生の物語が表現されている。豪雨災害で失われてしまった「蛍」がとぶ風景を、プロジェクションマッピングで校舎に再現した。被災者の方から「あの光景をみて、黒川の活動を続けてきて良かったと思えた」「災害前の蛍の乱舞の美しさを思い出した」というコメントがあり、感情の連続性をアートが紡いでいた。



デジタル枯山水「調身・調息・調心」／密岡稜大

2020.11.14 「黒川庭園と喫茶アート養生会」

無観客公演で行われた復興支援のアート活動や交流の様子を、地域内外の方々とインターネットライブ配信で鑑賞し、感じる心を分かちあうものである。

「短詩五七五、連句 の円環」は、被災地の自然をテーマに詠んだ短詩五七五の下の句を、次の方の上の句に繋いでいく作詩のリレーである。共星の里の発句から、この小冊子に登場する方々が詠んだ短詩が続いている（QRコードより全作品掲載ページへ）。

「短詩五七五、連句 の円環」
連句を記したオブジェ



逆転の発想が希望の灯に
流木を使ったウッドキャンドル

あさくら観光協会事務局長 ／朝倉ウッドキャンドル 発起人 里川 径一さん







転んでもただでは起きない

豪雨災害直後、自分ができることは何かと考え、今までの自分の経験（ボランティアや NGO でのカンボジア支援等）を生かし、情報発信等を行ってきた里川さん。ご自宅は、甚大な被害を受けた黒川地区で、道路は不通。しばらく自宅に戻ることもできませんでした。数日後、ようやく車で黒川へ。変わりはてた風景、泥だらけの我が家をみて、自分も“被災者”なのだ、と実感します。

しかし、ここで、里川さんは非凡なる直感力と行動力を発揮します。「大量の流木を何とか活かせないか」と、ウッドキャンドルを作ることを思い立つのです。クラウドファンディングを始め、SNS で呼びかけると、わずか 1 か月で集まった支援者は 455 人。目標額 500,000 円をはるかに上回る 6,019,000円の支援金が集まりました。

非常時に活きる経験とつながり

この反響について、里川さんご自身は「動き出しの早さが功をなしたのでは。また、被災者自身が、前向きに動き出している姿に希望を託したい人が多かったのかもしれません」と謙虚に振り返ります。「何かしたい」と思いながらも、具体的に動けずにいた人の受け皿という意味でも、このプロジェクトの意義深さを感じます。

一方でご自身も被災しており、家庭をもちながら、「観光協会」という立場で朝倉の情報を発信し続けなければなりません。何役もこなしながらの活動は、並みならぬご苦労もあったのではとたずねると、「やって後悔するのとやらずに後悔するなら、迷わず前者を選ぶ。これまでの経験で培ってきた現場の勘みたいなものですね。今思えば、緊急時だからこそやれたのかもしれません（1 か月でクラウドファンディングを達成）。なにより、不思議なくらい、多くの人の手が自然に添えられたことに、なんというか、これはやれってことやろな、と。自分一人では、決してできないことですから」と屈託なく笑う表情に、誰もが応援したくなる里川さんの魅力の所以を感じました。この他、「コスモス食べてあさくら応援、乙女の真心プロジェクト」の立ち上げ(p23)や「黒川復興プロジェクト」のバックアップ(p21)など、その行動力で被災地全体のボトムアップに尽力されました。この冊子の複数の支援団体から、里川さんへの感謝の声を耳にしています。また、「“連携”が非常時の力。ここで培った連携のあり方を、朝倉メソッドとして伝えていきたい」と、経験を教訓にかえながら、広い視野で復興に向き合っておられます。

あさくらが、第 2・第 3 の故郷になれば

実は「博多万能ねぎ」の名で売られている小葱は、すべて朝倉産。そして日本初の空輸出荷野菜なのです。そのご縁で、JAL（日本航空）は泥出しのボランティア、および朝倉観光支援のバスツアーを誘致してくれました。また、あさくら復興祭ではねぎ投げ競技「JAL 空飛ぶネギ大会」も実施してくれました。

「災害（saigai）と幸い（saiwai）は、紙一重。被災地にボランティアで関わった人は、そこを第 2、第 3 の故郷のように思ってくれる。彼らが朝倉のことを思い出すきっかけを作れば、継続して支援してもらえるのではないか。今後は、支援者との縁をいかに結び続けていくかが課題です」と、里川さんは、常に一歩先を見続けています。

私たちができること
サポーター制度を作る。新しく生まれた繋がりや活動に目を向けて常に前向きに歩む。

私たちがのぞむこと
朝倉を、何かやりたい方々の面白いチャレンジの場所にしてほしい。自分たちで主体的にやれる人に、どんどんチャレンジしていただき、発信してほしい。



里川 径一 さとがわみちひと
熊本出身。大学で心理学を学ぶ。阪神大震災後、神戸でボランティアを経験。NGO でカンボジア支援を経験。結婚後、食料自給率 108% の朝倉に魅力を感じ、定住。現在、あさくら観光協会事務局長。

朝倉ウッドキャンドル
災害で発生した流木からウッドキャンドルを作り、販売することで、地域コミュニティの支援に充てる取り組み。人々の関心を喚起し、防災意識を育む一助となっている。

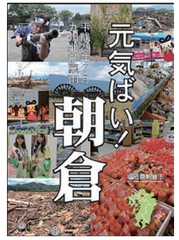
あさくら観光協会
［住所］福岡県朝倉市甘木1320 ［電話番号］0946-24-6758
［E-mail］info@asakurakankou.com ［Web］http://amagiasakura.net/

観光資源を活かし 地域内外の橋渡し 人と仕組みをつなぐマネージメント

朝倉市役所商工観光課 観光振興係長　隈部 敏明さん











被災者と原鶴温泉との橋渡し

隈部さんは、朝倉市役所の観光振興係長として、朝倉の観光情報の発信や農産物のブランド化推進、原鶴温泉街の活性化に取り組んでいました。原鶴温泉は「美人の湯」で知られています。ここは、各旅館で違った雰囲気の温泉を楽しむことができ、朝倉の観光名所の１つとなっています。発災時、原鶴温泉は直接被害を受けることはなく、営業を続けることができました。

災害直後、原鶴温泉旅館協同組合会長の井上善弘さん主導で「被災者の方々を対象としたお風呂の無料開放」が行われました。被災者は大切なものを失い、慣れない避難所生活と復旧作業を強いられ、心底疲弊しています。原鶴温泉旅館協同組合は、少しでも被災者の方々の心身のストレスを軽減し、癒しを与えたいと考えました。隈部さんは、この温泉無料開放について、情報を広く発信し、広報につとめました。それは、被災者支援はもちろん、原鶴温泉が元気に営業していることを地域外に伝え、「朝倉は危ない」という風評被害を避けることも意図したものでした。

一方、被災地では、大勢の被災者の方々が温泉を利用できとても助かっていた反面、温泉の混雑が問題になっていました。そこで原鶴温泉旅館協同組合と隈部さんは、被災者の方々がスムーズに温泉を楽しめるように入浴の手配を行いました。まず、より多くの被災者の方に利用してもらえるよう、避難所に「原鶴温泉無料入浴券」を配る活動を行いました。次に、周囲の情報の集約や「ここの時間に、ここの温泉旅館に何人」と旅館ごとに人数制限を設けて、温泉利用をマネージメントする活動をしたそうです。避難所の方々の中には、車が被害にあって動けない方もいたため、避難所から温泉までの送迎バスの手配も行いました。原鶴温泉旅館協同組合のほかにも、筑後川温泉、吉井温泉が、温泉無料開放による被災者支援を行いました。これらを支えた朝倉市役所の敏速な対応によって、被災者とともに、地域の観光資源も守られたのです。

支援に応えるための備え

朝倉市役所には、「朝倉を応援したい。地元の農産品などを売りませんか？」といった声が、地域外から多数寄せられていたといいます。隈部さんは、外部からのオファーと出店者をつなぐ役割として情報集約に取り組みました。「朝倉の応援のブースを準備してもらえるのに、出店できる朝倉側の人間がいないのはもったいない。ブースを埋めたい」と、その一心で三連水車の里あさくら（p11）や農業協同組合などに掛け合い、朝倉の農業販路の窓口として隈部さんは動きました。その結果、これらの出張販売によって、農産物直売所は利益をあげ、被災地農家の生活再建に繋がりました。また、福岡トヨタでは、店舗への来場者プレゼントとして、朝倉の農産物を採用してくれました。このように「購入による支援」という動きは他にもありましたが、備えが足りず、全てに対応することは難しかったそうです。「災害が起こった後にどのような動きが起こるのか、それにどう対応すれば復興に繋がるのかを平素から想定しておくことが大切」と隈部さんは語ります。朝倉市全体の利益を考え、問題解決のため「人や仕組みをつなぐマネージメント」に徹する隈部さん。あさくら観光協会（p7）や農産物直売所など、多くの朝倉市民が隈部さんに信頼をよせています。

私たちができること
あまぎ水の文化村などの施設を活用し、情報発信をする。

私たちがのぞむこと
朝倉には大学がない。次世代の若者に、朝倉のことに関心をもってもらい、イベントに参加してほしい。



隈部 敏明 くまべ としあき
平成 26 年に朝倉市役所 商工観光課に着任。
朝倉の観光情報発信ほか、農産物のブランド推進を担当。その業務を通して、三連水車の里あさくらや農協などとの繋がりをもった。

朝倉市役所商工観光課
［住所］福岡県朝倉市宮野 2046-1
［電話番号］0946-52-1428
［E-mail］syou-kankou@city.asakura.lg.jp

農産物のいのち 販路のリレー
連携でつなぐ農家の未来

三連水車の里あさくら 旧館長 櫻木 和弘さん







販路の確保、駐車場の提供、出張販売の連携

災害当日、櫻木さんは自宅の床下浸水や流れてくる畳・土砂と4、5 時間も格闘するなど、気の休まらない夜を過ごしたそうです。復興に着手できたのはその２日後で、被害を受けた地域の組合農家さん一軒一軒に安否確認の電話をかけることからはじめました。その数約530人。メールでは連絡が取りにくい方もいるため、電話は有効な連絡手段となりました。

数日後、組合の有志メンバーと職員で駐車場の土砂を移動させたことで、農産物を持ち込めるようになりました。しかし、まだ三連水車の里あさくらでの販売は厳しいと判断した櫻木さんは、他の販売所での出張販売を考えます。近隣の農産物直売所「みなみの里」や「バサロ（道の駅原鶴）」にお願いをしたところ快諾。「命ある農産物の販路が途切れず、本当にありがたかった」と感謝されていました。

みなみの里の福丸未央さんにもお話をうかがったところ、「農産物直売所は売り場を確保することが使命です。生産者にとって被災後に生計を維持できる場があることは再建への大きな力になります」と教えてくださいました。

災害から約 1 週間経った頃、櫻木さんは直売所の駐車場を整備し「災害関連の駐車スペース」として提供しました。発災から時間の経過と共に、①自衛隊・救急・消防など → ②復旧工事車両 → ③マスコミ → ④ボランティアの作業車両、とそれぞれのフェーズで車が押しよせます。路上駐車は復旧の妨げになるため、災害関連車を店舗駐車場へと誘導をしたそうです。「災害直後には自分の目の前のことで手一杯でしたが、だんだんと周囲に目を向けて行動できるようになりました」と櫻木さんは語ります。

店舗での販売が再開した後も、出張販売は継続しており、その件数は災害発生から 1 年間で約 200 回。三連水車の里あさくらだけでは対応できなかったため、市役所・ＪＡ等と連携し販売しました。

こうして、直売所は「出張販売で農産物の販路の確保」を行い、「駐車場の提供によって地域内外の人々が集まる拠点」としての役割を担い、「地域農業の連携」を生みだす場となったのです。

直売所から情報と物流の集積所へ

災害時の三連水車の里あさくらを、櫻木さんは「直売所が情報と物流の集積所となった」という言葉で表現されました。櫻木さんは、生鮮食品である農産物を中心とした産業の連続性を担保するために、情報と物量をつなぎ続けました。

被災地の組合農家の方々は 75 歳以上の方が多く、災害の影響で離農しそうになった方も多かったようです。しかし、三連水車の里あさくらの取り組みや、ボランティアの応援のおかげで、組合員の中で離農した方はほとんどいませんでした。手塩にかけた収穫物を、鮮度を保ったまま販売できることが、どれほど被災農家の気持ちを支え続けたことでしょう。

櫻木さんは現在、朝倉市の嘱託職員として地域活性化に取り組んでいます。またアグリガーデンスクール (p29) にて、社会人向けの就農教育の講師を引き受けることも。「農業は生命維持産業。人が生きるために一番大事な仕事。誇りを持ってやってください」と、熱い想いを伝えています。

私たちができること
朝倉に人が集まる機会をたくさんつくっていきたい。

私たちがのぞむこと
現在、地元のシンボルである三連水車や店舗裏の芝生広場が復活している。ここを利用したアートイベントなど、企画のアイデアを募集中。



櫻木 和弘 さくらぎかずひろ
東京で生鮮食品を扱う流通関係の会社に勤務。当時、多様な店からの情報を集約して判断する立場にあり、速やかな判断と行動が求められていた。この経験が、今回の災害支援の契機になっている。2013 年に朝倉にUターンし、三連水車の里あさくらの館長に着任（2019 年まで）。現在は朝倉市の嘱託職員として地域活性化に携わる。

三連水車の里あさくら
［住所］福岡県朝倉市山田2192-1
［電話番号］0946-52-9300
［Fax］0946-52-9100
［Web］http://www.sanren-suisha.com/

平時の連携が有事を救う
復旧の土台を整えた地元青年団体

一般社団法人朝倉青年会議所（JCI）2021年度 理事長　天野 茂晃さん







防災協定で築く、顔の見える関係

2016年の熊本地震を教訓に、日本青年会議所から各地の青年会議所へ「社会福祉協議会と防災協定を結びましょう」と呼びかけられたのを受け、朝倉青年会議所（JCI）は2017年5月31日、社会福祉協議会と「防災協定」を締結しました。その時のJCI防災意識委員長だった天野さんは、この協定締結によって、朝倉市、筑前町、東峰村の関係者たちと「顔と名前と携帯番号を知っていて、お互いの携帯電話に電話番号が登録されている」という関係を築くことができました。関係者たちの間では、「まあ、災害なんて、滅多に起きないだろうけどね」という会話が交わされていたそうです。まさか、そのわずか約1ヶ月後に、この協定が実際に役立つことになろうとは、誰も予想していませんでした。

資材と道を整え、復旧作業のできる環境に

2017年7月5日の水害発生直後、JCI事務局も社会福祉協議会も、大混乱に陥りました。毎日毎日、知らない電話番号を含め、100件以上の電話が掛かってきます。到底その全てに対応できる余裕はありません。そのような状況の中、関係者と迅速かつ的確に連絡を取り合えたのは、「すでに顔と名前を知っていて、お互いの携帯電話に電話番号を登録済み」という関係を築けていたからでした。

JCIは災害発生から7日間で、スコップや一輪車などの資材を迅速に収集できました。そこで、資材が足らずに困っていた社会福祉協議会のボランティアセンターに、スコップや一輪車などを提供しました。また、JCIの中の土木関係のメンバーが中心となって重機を出し、道路や、被災した家屋の周りの土砂やガレキの片付けを行いました。道を仮復旧できたことで、全国から集まってきたボランティアが家屋の中まで入っていって泥出し作業をできるようになったのです。「もし協定を結んでいなかったら、JCIから社会福祉協議会への速やかな資材提供もできず、ボランティアによる泥出し作業は大幅に遅れていた」と、天野さんは防災協定の重要さを語られます。

防災は、平時からの意識と備えが肝心

2017年の災害支援活動を振り返って、「災害が起こってから慌てても遅い。行政、社会福祉協議会、地元団体などが平時から連携し、災害に備えて細かなシミュレーションをしておくことが必要」と天野さんは話されます。たとえばスコップや一輪車などの資材、水や毛布などの生活用品を収集する際、置き場所をどこにするのか。集積場所から避難所などへ運ぶ手段をどうするかなど、関係団体であらかじめ協議しておけば、いざ災害が発生した時の混乱を防げると言われます。また、有事の際に復旧関係の作業車両が駐車できるスペースを予め登録しておく「駐車場ドナー制度」を社会福祉協議会が設けている地域もあり、その周知や登録の推進など、市民の方々も含めて協力が必要だということです。実際に災害現場の最前線を経験されての貴重なお話には、非常時におけるソーシャル・デザインのヒントが凝縮されていました。平時の意識と連携が、敏速かつ重要な実働を生み出すことを可能にしたのです。

私たちができること
平時における防災教育。有事における物資の収集と提供。

私たちがのぞむこと
有事の際の混乱軽減のための、情報整理のシステム作り。避難者や作業者などが見て一目でわかるような掲示物、看板、ユニフォーム、ウェブ上のページなどを、デザインや情報の専門家の立場から提言いただきたい。モデルを作って、良いものは全国共通デザインにして普及させれば、広く役立つ。

2020年12月、朝倉ライオンズクラブから資金提供を受けて共同事業にて、朝倉市に「災害復旧ボランティア資材倉庫」を寄贈。
http://www.jimotoshinbun.com/articles/2020-12-14.html



天野 茂晃 あまの しげあき

本業は鶏肉加工卸業を主とする食品業。JCIの活動を兼任し、2017年度はJCI防災意識委員会の委員長を務めていた。

一般社団法人朝倉青年会議所

JCIは人材育成の場。また、つなぎデザイン（契機づくり）をする団体。「0から1をつくる」ことをモットーとする。その一環として防災活動を行う。社会福祉協議会と連携しての復旧活動、その後の復興活動。また、防災意識の啓発。

［住所］福岡県朝倉市甘木955-11
［電話番号］0946-22-8930　［Web］http://asakurajc.com

現代の子どもたちに農業体験の機会を
命を育てる体験こそ“未来への投資”

農業体験受け入れ 林 利則 さん 林 秀子 さん







黒川の豊かな自然と歴史ある文化

2017 年の災害以前から、福岡市や春日市などの複数の小学校の児童を受け入れ、多くの子どもたちに農業体験の機会を提供してきた林さんご夫妻。今回の豪雨災害によりご自身の土地や近隣の方々の家屋、果樹園、田畑が大きな被害を受け、心を痛めておられました。近隣には、水害により居住も耕作も難しくなって、耕作再開の目処も立っていない農地が多く見られます。「農家が大事にしてきた果樹園や田畑に流木や岩が流れ込んで、場所によっては今もまだ復旧されずそのままになっている。見ていて辛い」と話されます。

「黒川地区は標高 250m ほどで、寒暖の差があり、地の利が農業に適しているんですよ。水と土が豊かで、冬の朝には霧が立ち込め、農作物がおいしく育つ。また、黒川は歴史や伝統を大切にするところで、三大修験道のひとつである英彦山修験の黒川院があったところ。黒川院あっての黒川だと思っています」と、黒川の土地柄や文化への愛着を熱く語っていただきました。

食べ物を育てる体験を通して知る、本物の味

「命を育て、食するという体験そのものを、教育的に重要な“未来への投資”と捉えています」と、林さんは子どもたちへの農業体験提供の大事さを語ります。幼い頃から市販のお菓子ばかり食べて育った現代の子どもたちの中には、「果物が苦手で食べられない」という子もいます。林さんの梨園へ農業体験に来る子どもたちには、林さんが梨の一生についてお話をします。梨の白い花が咲き、受粉し、小さな実が育つ。自分の名前を書いた袋で、梨の実に袋掛け体験をした小学生たちは、秋になってから収穫体験に来ると、自分の袋の場所をしっかり覚えていて「私の梨は、ここ！」と駆け寄って行くそうです。

「食べ物を作る体験の共有。そして、本物の美味しさを実感してもらうことが大切。うちの梨園での農業体験を通して『苦手だった果物を食べられるようになりました』と言ってくれる子どももいてね。それが嬉しい」と林さんは話されます。

共に汗を流し、苦労と楽しさを共有

林さんは、田植え体験のお世話にも力を入れています。現代の子どもたちのほとんどは田植えの体験が無いので、手足や服が真っ黒になりながら泥の田んぼに入っていくこと自体に怖さや苦手意識を覚える子もいます。また、泥の中で足を踏ん張ることにも慣れていないので大変です。うまく泥の中で歩けない児童を先生が支えながら一緒に田植えをすることもあるそうです。「同じ目的に向かって共に汗を流し、心がまとまる体験は貴重なのです」と林さんは語ります。収穫した米を竹筒で炊く手作り料理体験も喜ばれるそうです。もちつき体験の際には、赤い色が鮮やかなビーツもち、香りの爽やかな柚子もちなど、様々なバリエーションで子どもたちを楽しませています。また、菜園の作物や山菜を使って、黒豆や緑豆の味噌やフキノトウ味噌を手作りしています。「自然豊かな山間部の暮らしの魅力を、ぜひ広く知ってもらいたい」と、林さんご夫妻は呼びかけています。

私たちができること
農業体験や竹飯づくり体験などの機会提供。冬には味噌作りワークショップも開催できる。

私たちがのぞむこと
黒川に関心を寄せていただき、黒川に来ていただくこと。高齢の農家の方々をサポートする農業ボランティア参加（援農）をお願いしたい。地域全体のためになるようなアイデアや企画があれば嬉しい。



林 利則 はやし としのり（写真右）
林 秀子 はやし ひでこ（写真左）
農業家。米や梨をはじめ、さまざまな野菜・果物を栽培している。修学旅行や日帰り農業体験などを受け入れ、田植えや果物収穫（利則さん）、料理体験、味噌づくり（秀子さん）のワークショップを行なっている。

農業体験受け入れ
農業を体験する機会の少ない現代の子どもたちの社会勉強のために、朝倉グリーンツーリズム協議会の矢野公子さんらの協力を得ながら農業体験を提供する活動を行なっている。
［住所］福岡県朝倉市黒川2213
［電話番号］080-5217-4044

倒流木チップ・薪づくり 農業支援
ソーシャルワークと未来ビジョンの創造

高木薪づくりプロジェクト、黒川みらい会議ほか　師岡 知弘さん







できる事はないか

「高木・黒川の環境が好きなのです」と話す師岡さん。災害発生の７月５日、田仕事を終えた師岡さんは自宅のある高木地区へ帰ろうとして道を探しますが、堆積した土砂と冠水した道路に帰路を阻まれ、実家（大庭地区）へ戻りました。待機を余儀なくされた師岡さんは迅速かつ冷静に高木地区の安否確認を始め、情報を収集していきました。道が通行可能となった７日、登庁した師岡さんは「何かできる事はないか」と騒然とした朝倉市災害対策本部へ向かいます。情報が錯綜する中、「地域の事が分かりますが、お役に立てませんか」と声をかけました。刻一刻を争う中、集落支援員としての高木地区に関する知識が救出を後押しし、日没寸前、最後の救助ヘリが飛び立つ中、救出名簿に高木地区全員の名前を確認して救助活動が終了。一人の地域への想いと行動が、大きな力となったのです。

豊富な資源を事業化し 復興支援をソーシャルワークへ

７月 14 日、師岡さんは東日本大震災でのボランティア経験を活かし、自ら復興プロジェクトを立ち上げようと動きますが、行政職員としての立場では限界がありました。そうした中、地元の若手にプロジェクトの提案をします。最初の一歩をなかなか踏み出せない中、思いを同じくする柏田智さん (p21) を代表に、黒川復興プロジェクトがスタート。以降、たくさんのボランティアが駆け付け、適材適所、復旧活動へと導かれて行きました。秋には、住民の方が収穫をあきらめていた田んぼをボランティアのみなさんと手刈りし、一部を「早期復旧祈念米」と称し、その売上金を黒川復興プロジェクトの活動資金にしました。10 月、師岡さんの住む仮設住宅でグリーンコープと朝倉市ボランティア連絡協議会会長を務める師岡愛美さんに協力を依頼し、住民の心と身体を癒す頓田団地食堂を開設。1 食 200 円の代金は仮設の共益費として活用、仮設住宅の生活を支えました。

2018 年 8 月、師岡さんは災害の特徴でもあった流木に着目します。高木の資源であった流木を薪として販売し、収益を地域に還元する高木薪づくりプロジェクトを立ち上げます。当初一人での薪づくりでしたが、後にボランティアと地元住民も参加。住民の方へ多少の日当も支払い売上金も地元に還元できます。翌年の４月には、流木の中の檜をチップ化し、「陽の木のチップ」として商品化。師岡さんの提案に、朝倉市の中学生がラベルのデザインに協力してくれました。

黒川みらい会議

師岡さんは、地域の未来像がないまま、ただ復旧工事が進められていくことに危機感を感じました。人口わずか 180人程度になってしまった高木地区の未来を築きたいと、地域有志と共に黒川みらい会議を立ち上げ、これまで 50 回以上の会議を重ねています。その中で得られたビジョンは、災害前以上に賑わいのある地域を目指して、「穂多留 (ほたる)・みどり・笑顔・ひかる黒川」を採択。高木の農産・加工品を直売するチーム「たかき穂多留市」も生まれ活動しています。師岡さんはインタビューで話しています。「常に良くなるしかありません。みんなで考えてより良いものを築いて いきたい」

私たちができること
山は生きる力を学べる場所です。自然を感じ、学び、憩う場として未来を担う若者の可能性を引き出してあげたい。

私たちがのぞむこと
この黒川地区を人が集う場所にすること。



師岡 知弘 もろおか ともひろ
朝倉市出身。2002 年より外資系製薬会社に勤務し、営業経験を積んだ後、本社へ異動、以後 10 年間、市場調査を担当。2015年に朝倉に Ｕターン、翌年から朝倉市の集落支援員として地区コミュニティ事業支援を行う。現在は、人と地球にやさしい生き方を伝えるべく環境事業を行いながら、誰でも「ただいま」と言える家「みんなの家みんか」づくりをはじめ、多様な地域の課題に取り組んでいる。

師岡さんへの連絡
みんなの家みんか（MINKA）
［住所］福岡県朝倉市黒川 1762-2
［電話番号］090-9705-4406
［E-mail］minnanominka@gmail.com

農地復旧への関係人口をふやす
農林業の復興が地域の基軸をつくる

黒川復興プロジェクト 代表 柏田 智さん（農業家 鳥巣 良彦さん）







黒川復興プロジェクト発足

発災時、柏田さんは仕事で市街地にいました。自宅がある黒川への車道は寸断され、携帯電話は通じない状況でした。黒川の被害は甚大だったため、避難所生活の対応もふくめ、何から手をつけてよいのかわからないほど混乱した状況が続きました。

災害後、社会福祉協議会による様々なボランティア活動が始動しました。しかし、災害直後のボランティアは民家、住宅の敷地に限られており、農地に対するボランティアは殆どありません。そこで、八女市黒木町（平成 24 年豪雨被災地）で農業支援を行うNPO「山村塾」とつながりのあった柏田さんは、農地・水路・稲刈りなどの作業を見越し、農村復興のためのプロジェクトを立ち上げることを決意しました。これを「黒川復興プロジェクト」と名付けます。活動拠点は、2016年に閉鎖したJA 筑前あさくら高木支店の二階を再利用しました。柏田さんは避難所（ピーポート甘木）から

黒川へ通いながら作業しました。一人では無理かもしれないと思っていたところ、同じ宮園地区の五十嵐珠美さん、薙野泰孝さんが参加します（現在は 4 人）。こうしてプロジェクトは始動していきました。地域支援員の師岡さんの協力のもと、農業復興作業のニーズを把握し、SNS を使ってボランティアを募りました。ボランティアを希望してくれた人々が「いつ、どこで、何人ぐらい、どのように協力してもらうか」を考慮した上、事前予約制で現地へ来ていただき農地作業のニーズに対応しました。一番多い時は、1 日に100人もの方が黒川に来てくれました。

農地復旧は心の救済

鳥巣さんは、このプロジェクトに救われたという梨農園家の一人です。果樹園に土砂が流れ込むと、根が呼吸できず立ち枯れてしまいます。果樹が窒息する前に、土砂を取り除かなくてはいけません。柏田さんたちのおかげで、果樹の命だけでなく、精神的にも救われた農家は多かったそうです。鳥巣さんはいま、山間部の自然環境そのものを資源と考え、養蜂（日本ミツバチ）など新しい発想の環境活用を模索しています。「黒川で農業体験をしてもらいたい。収穫の楽しい部分だけでなく、作る過程を知ってもらい、食べ物のありがたさを感じてほしい」そうすることで、農作物を作る過程一つひとつに敬意が生まれ、「出来たもの」ではなく「作ったもの」という意識が芽生えると鳥巣さんは語ります。

地域と人をつなぐコーディネーター

柏田さんは、「農業の復興を目指すことが地域の復興」といいます。地域のみんなの気持ちが伏せっている中、立ち上がった黒川復興プロジェクトは、農地の復興だけでなく、地域の輪の活性化につながりました。柏田さんは、地域と人をつなぐコーディネーターとして支援の輪を広げ、お互いが与えあう「相互コミュニケーション」を生み出し、地域に大きく貢献しています。そして、農地や森の再生のために汗を流すことが、命の根幹である農作物への意識や、自然に向き合う覚悟を育むことを教えてくれるのです。

私たちができること

ふるさと米、未来会議、産直などの具体化を基にした、経済化する仕組みづくり。山間地の人と都市部の若い人の間に信頼関係を築きたい。本物の野菜や米を食べ、山のきれいな空気や水で健康になって欲しい。

私たちがのぞむこと

仕組みを考え、実行できる人に関わってほしい。黒川に足を運んで、風や鳥の声を、身と心で体験してもらいたい。



柏田 智 かしわだ さとし（写真左）

北九州市立大学卒業。林業家。
2009年、サラリーマンを辞め、林業に転向。朝倉森林組合勤務を経て、2014 年に黒川へ移住。豊かな里山づくりを目指していた中で、今回の九州北部豪雨にあう。

黒川復興プロジェクト

農地や森林の再生のために、ボランティアと支援先を結ぶ活動を行う。

［住所］福岡県朝倉市黒川 1537-1JA 筑前あさくら高木支店跡
［電話番号］080-3181-0403
［E-mail］asakura.fukko@gmail.com
［Web］https://asakurafukko.wixsite.com/kurogawafukko

コスモスでつながる・広がる
人との出会いから生まれたドレッシング

宮園たんぽぽの会 / 蛍雪の里 黒川山荘 笹栗 浩明さん





人との出会いから生まれたコスモスドレッシング

宮園たんぽぽの会は、コスモスドレッシング「乙女の花ドレ」の製造・販売に尽力してこられました。たんぽぽの会は、朝倉市宮園地区の女性を中心とした 5 人ほどのグループで、豪雨災害後に立ち上げられました。

宮園地区は豪雨災害で荒れてしまい、田畑には瓦礫が堆積し、トラクターで耕作もできない状態となりました。そのような宮園の荒れてしまった土地を見ると悲しい気持ちになり、黒川復興プロジェクトの柏田さん (p21) の助言もあり、綺麗な花を植えようということでコスモスやひまわりの花を育てました。その後あさくら観光協会の里川さん (p9) から、「コスモスは食べられるのでドレッシングにしたらどうか」というアドバイスをもらい、コスモスドレッシングを作ることに。ドレッシングの製造を始めるまでは、コスモスを食べることができると知っている人はほとんどいなかったそうです。

以前から交流の深いたんぽぽの会のメンバーや、その活動を後押ししてくれる方々の繋がりで、コスモスドレッシングは生まれました。

チームワークとやりがいの源泉

たんぽぽの会のみなさんは、ドレッシングづくりにおいてコスモスそのものピンク色がきれいに出るようにと、多くの努力や苦労をされました。ご年配の方もいらっしゃいますが、たんぽぽの会のみなさんが仕事にやりがいを感じながら楽しく生き生きと作業をしています。

メンバーの方はたんぽぽの会について、「チームワークがよく、集合をかけるとすぐに来てくれる」と話します。また宮園地区の住民の方々は、しばしば近くを通った方や郵便配達員さんをご自宅の東屋に快く迎えてお茶を振る舞うなどされています。そのような温かく優しいお人柄が、たんぽぽの会の良いチームワークややりがいの源泉となっているのではないでしょうか。

私たちができること
コスモスドレッシングの製造・販売。(10 月以降、宮園ふれあいセンターやインターネット等で販売)

私たちがのぞむこと
コスモスドレッシングを買ってもらいたい。自分たちと同じように草取りをして、コスモスを植えて、花を摘んで、ドレッシングを作るボランティアをしてほしい。



宮園たんぽぽの会

［住所］
福岡県朝倉市黒川 宮園ふれあいセンター
［電話番号］
080-2731-4112 (五十嵐珠美さん)
［Facebook］
https://www.facebook.com/miyazonotanpoponokai

食を通じて黒川の魅力を伝える

笹栗さんは、黒川地区の数少ない飲食店である「蛍雪の里 黒川山荘」のシェフをされています。十割蕎麦やカレーなど、地元の食材を使った健康な食を通して黒川の良さをアピールしています。

災害後に、宮崎さんらにコスモスドレッシングを提案したあさくら観光協会の里川さんが、「コスモスを使った料理を作ってほしい」と笹栗さんに提案しました。笹栗さんは、黒川山荘を開店する以前に海外でシェフとして活躍されており、その経験と発想力から生まれた「コスモスカレー」は、メディアでも取り上げられました。

私たちができること
大学や企業の食堂などでの出張マルシェ。カレーライスやカレーパンの出張販売も可能。店内のレンタルスペースとしての貸し出しをかねて、食事を提供できる。

私たちがのぞむこと
復興途上の黒川を見に来てほしい。ボランティア作業も随時募集している。梨を買ったり、食事をしていただけるだけでもありがたい。



笹栗 浩明 ささぐり ひろあき

西南学院大学卒業後、料理の道へ。1995 年、オーストラリア永住権を得て渡豪し、ジャカルタ、ドーハなどのホテルやエアラインで料理に携わる。偶然見つけた黒川の物件に縁を感じ開業したが、その 10 か月後に被災。

蛍雪の里 黒川山荘

［住所］福岡県朝倉市黒川1731
［電話番号］080-6403-5913
［Facebook］https://www.facebook.com/kurogawasansou

ボランティアの役割を考える
できる人ができる時にできることを

JRVCチーム「螢火」 岩佐 憲一郎さん 伊藤リカさん





“螢火”に込められた思い

チーム「螢火」は、一般社団法人JRVCの朝倉復興のために結成されたボランティアチームです。代表の岩佐憲一郎さんは、出身地でもあるうきは市で本職の消防士として活動されています。

災害発生後、岩佐さんは仕事のない休日の時間を縫って朝倉市で個人として復旧の手伝いをされていました。その後、災害ボランティアセンターが立ち上がりましたが、作業時間や作業内容の制約が多く、ボランティア活動としてできることに不自由さを感じていました。そこで岩佐さんは、「自分たちで仲間を集めて活動したほうが良いだろう」と思い、伊藤さんを含む知人の方々とグループを作って活動を始めました。

チームとして最初に活動したエリアの高木地区は、蛍がとても有名です。しかし災害後に蛍の住処の木々が流されてしまいました。岩佐さんたちは「この蛍たちが戻ってくるまで手を差し伸べよう。蛍の光のような希望の光を与えよう」という思いを込めて、チーム「螢火」と名付けられました。

チーム「螢火」が、柿畑の土砂を出す作業をすることになった際、ただでさえ広い畑の土砂出しを、結成して間もない自分たちが全て行うのは難しいと感じ、他の団体と一枚岩になってやろうとしました。重機を持っている・力仕事が得意・解体作業ができるなど、団体によって「できること」が異なります。各団体の強みを活かして、お互いに協力していきました。

資金や経験が豊富な他団体に対して、チーム「螢火」は「アットホームで楽しく作業できるところ」が強みであると伊藤さんは語ります。ご自分たちもボランティア活動を始めて間もないので、一般のボランティアの気持ちがよく分かり、辛いだけではボランティアが続かないと感じて、毎回の活動にお楽しみ要素を取り入れているそうです。ちょっとしたお菓子を振舞ったり、果物を持ってきたり。楽しんで作業をしてもらって、お互いにコミュニケーションをとり、またボランティアに来てもらう、という工夫をされています。

ボランティアの役割

岩佐さんたちは仮設住宅への支援も行なってきました。行政のサービスや支援は平等ですが、被災者の被災の程度は平等ではありません。お年寄りや長期避難の方は元の生活に戻って自立することが難しいため、そのような方々の支援をされています。

岩佐さんらはチーム「螢火」として、ボランティアで「何かをしてあげる」のではなく、「一緒にやろう」という姿勢を大切にされています。現在は支援を受けている方々も、いつかはまた自分たちで生活できるようにならなければいけません。そのため、ボランティアが一方的に「何かをしてあげる」作業団体になるのではなく、被災者の方も一緒に動いて自立を促す、ということがボランティアの役割であるとおっしゃっています。

「ボランティアをする気持ちがあっても作業ができないという方もたくさんいると思います。そういう方でも、例えばお金がある人はお金を使ってください。力がある人は力を貸してください。何か持っている人は物を送ってください。何もない人は祈って朝倉のことを思っていてください。できる人が、できる時に、できることをしてください」岩佐さんの真心のこもったこの言葉を、いつまでも心に留めておきたいと感じました。

私たちができること
アットホームで楽しいボランティア活動。

私たちがのぞむこと
朝倉のことを忘れずに気にかけてほしい。環境問題にもっと関心を持ってほしい。



岩佐 憲一郎 いわさ けんいちろう（写真右）
うきは市出身。一般社団法人 JRVC 朝倉災害ボランティアチーム「螢火」代表。消防士。

伊藤 リカ いとう りか（写真左）
うきは市出身。一般社団法人 JRVC 朝倉災害ボランティアチーム「螢火」メンバー。防災士。

JRVCチーム「螢火」
[電話番号] 090-8410-0119
[E-mail] ems999103@yahoo.co.jp
[Facebook] https://m.facebook.com/teamhotarubi
[Web] https://instagram.com/team_hotarubi

地域のニーズの交差 活動拠点を創出
息の長い志の縁を

一般社団法人Camp　望月 文さん







地域のニーズに応え続ける

朝倉市杷木の活動拠点にお邪魔して、代表の望月さんにお話をうかがいました。望月さんは災害当日被災地にいましたが、ご自宅ともに無事でした。サラリーマンを辞めて地元に戻ってきたばかりで、ご近所ともあまり繋がりがなく、どれくらいの被害状況なのか、周囲に聞くこともはばかられる雰囲気だったといいます。日が経つにつれ被害の大きさが周知され、この地域で育つ子どもたちの未来について考えるようになりました。「地域で子育てのできる環境を作りたい。そのためにはまず自分が動かなければ」という思いが、望月さんを活動へ駆り立てるきっかけとなりました。

本格的に活動を始動させたのは発災から 5 ヶ月後です。発災当初は 150 もあったボランティア団体が、その頃にはかなり少なくなっており、行政のボランティアセンターもなくなりました。しかし、地域からのニーズがなくなったわけではありません。ボランティアを受け入れ、適材適所の仕事をしてもらうためには、活動拠点が必要だと痛感。他団体とともに「杷木復興支援ベース」を立ち上げました。最初は、土砂のかき出しや倒木撤去などが主でした。その土砂かきが一段落するころ、地域の様々なニーズが見えてきたそうです。その多様なニーズに応えるために、ネットワークがますます重要となっていったのです。

復興支援からまちづくりへ

2019 年 6 月に、望月さんたちは、団体名から “復興支援” を削り「杷木ベース」へと名称変更しました。その理由について、望月さんは「活動2年目に入り、“復興支援” から “まちづくり” へシフトし、地域の生活力を減らさないようにしたかった」と語っています。

「行政が（全体をみて）“面” の支援しかできないのに対し、杷木ベースなら（顔がみえる人と人の）“点” の対応ができる。そこから解決の糸口を見つけてあげられる場所なのです」と言われていました。杷木ベースでは、150 人を超える県職員の新人研修を受け入れてきました。その際、研修生に「ここでの体験で感じた “1 人を助けたい” という想いを持った上で行政の立ち位置を確認し、業務に携わってほしい」と伝えているそうです。行政も、地域も、杷木ベースも、それぞれの役割があるのです。

水を張った桶

杷木ベースの紹介パンフレットには、「ベースは井戸端であり、そこには水を張った桶がある」とあります。井戸端は集う場所。そこにある “水を張った桶” は、皆が持ち寄った様々な想い（辛いことも、嬉しいことも）を浮かべる場所で、誰もが浮かべることも、見ることも、すくいあげることもできるのです。

インタビュー当日も、地域のお母さん方や区長さんなど、入れ替り立ち替り望月さんの元へ訪れていて、「地域になくてはならない存在」だと感じました。望月さんもまた “水を張った桶” に癒されたからこそ、利他の心を与え続けることができるのかもしれません。

望月さんは現在、杷木ベースから更に発展した形で一般社団法人 Camp として活動しています。

私たちができること

地域のニーズを集め、解決可能な各団体とマッチングさせる。繋ぐだけでなく、助成金獲得のアドバイスなど各団体の活動支援をする。集まった団体同士の化学反応を創生。

私たちがのぞむこと

「何かしたいけど、何をしたらいいのかわからない」という方に、「まず望月さんに相談してみたら」とすすめてほしい。関心を持つことで、既にボランティアの一歩を踏み出せている。アポイントさえ取ってもらえれば、いつでもいいので、杷木へ来てほしい。



望月 文 もちづき ぶん

サラリーマンをしていたが、地元で事業を始めるべく帰郷し、水害に遭遇する。

一般社団法人Camp

［住所］福岡県朝倉市杷木池田687-3
［電話番号］0946-62-0954、090-3535-3520
［Fax］0946-62-0954
［E-mail］tsunagi@camp2020.net
［Web］https://www.facebook.com/camp2020.net/

エゴマがつなぐ地域と産業
命の循環を生み出す土作りのプロ

アグリガーデンスクール＆アカデミー福岡 朝倉校 農場長　髙良 寛さん





植え付け場所を失ったエゴマの苗

アグリガーデンスクール(AGSA)は、就農経験の有無に関わらず、農業に関心のある人を対象に、土作りや有機栽培技術の指導・普及を行っているビジネススクールです。商品化・販売・流通までを繋ぐことにもつとめ、有機栽培を通じた交流や、関係人口の拡大を図っています。髙良さんは、ここで農場長を勤めています。

エゴマはシソ科の一年草で、健康に良い食品として近年注目が集まっています。髙良さんは、朝倉市黒川地区においてエゴマの栽培に力を入れていました。その2年目、苗の植え付けをしようとしていた矢先に、2017年7月5日の九州北部豪雨が発生。黒川への道路が寸断され、植え付け場所を失った苗がAGSAの農場に残されている状態になってしまいました。そこで急きょ、朝倉市の協力を得て市所有農地で栽培し、80kgのエゴマを収穫。翌年、黒川の代わりに朝倉市松末での植え付けを試みます。しかし、松末も水害の被害が大きく、田畑の上に20～40cmもの真砂土が堆積していて、そのまま植えても、肥料が流れてしまうような土壌になっていました。しかし、そのおびただしい量の真砂土を取り除くには、膨大な時間と労力、経費がかかってしまいます。

マイナスをプラスに変える、植物の命の循環

髙良さんらAGSAのメンバーで考え抜いた末、「筑後川の河川敷の草刈り後の草を、真砂土に混ぜてみては?」というアイデアが出ました。河川敷の草刈り後の草は通常、産業廃棄物としてわざわざ経費をかけて処理される物ですが、土作りのプロであるAGSAの皆さんは、その草に新たな価値を見出したのです。

吸い殻やペットボトルなどのゴミを取り除いた草を発酵させたものを水害後の真砂土に混ぜることで、土壌回復をはかっています。刈られた草の命を、エゴマが育つために活かす。命の循環。この方法で土壌を長期的に良好な状態に保てるか、まだまだ試行錯誤が必要だと語られますが、この手法が確立されれば、被災後の農地の回復において大きな希望となるでしょう。

農業と企業と市民をつないでいきたい

AGSAでは、農産物の栽培のみならず、商品化や販路開拓までの流れも一貫して力を入れています。エゴマ油は加熱・焙煎をせず生搾りの製法で、オメガ３脂肪酸を損なわず、その風味が好評です。朝倉市のふるさと納税の返礼品にも使われ、「三連水車の里あさくら」などにも出荷されています。

また、AGSAは、各企業のCSR（社会貢献活動）との連携の強化も図っています。複数の企業のCSR活動の一環として、子ども連れの家族など60人ほどが定植や収穫体験に来られることもあるそうです。

「農地を復旧するだけでなく、農産物の商品化・経済化の仕組みを確立するのが大切。エゴマをきっかけに、地域での経済循環を生み出していきたい」と髙良さんは語られます。髙良さんたちがめざす農業とは、持続可能な「命の循環のデザイン」です。地域の草資源を土壌改良に活かすという、その素晴らしい発想と創意工夫に、深い敬意を表します。

私たちができること
土作りや有機栽培技術の提供。「エゴマの栽培をやってみたい」という人、大歓迎。

私たちがのぞむこと
大学などとの連携。若い人の発想で、お菓子やパスタなど SNS 映えするものを含め、エゴマの活用法や新しいレシピを開発していただきたい。







髙良 寛 こうら ひろし
朝倉市役所に勤務し、都市建設部長としての市内の道路整備や災害復旧をはじめ、“まちづくり”などに携わる。退職後、AGSA にてエゴマの栽培、商品化などを行う。

アグリガーデンスクール＆アカデミー福岡 朝倉校（略称:AGSA）
［住所］福岡県朝倉市三奈木3023-1 旧朝倉農業高等学校内
［電話番号］0946-23-8257
［Fax］0946-23-8258
［Web］http://www.agrigarden.co.jp

若い世代が住みたい地元へ
東林田地区の未来を創り出すまちづくり

東林田ラバーズ (Lover's) 代表　塚原 健児さん







大好きな地元が水害に

塚原さんは、杷木生まれの杷木育ち、生粋の東林田っ子です。地元を離れたのは福岡市内の大学に通っていた4年間のみ。大学卒業後は WEB デザインを学びながら、福岡市内の IT 関係の会社で働いていました。その際も高速バスで杷木から通っていたそうです。被災当日は、仕事で福岡市内にいました。地元消防団に入っているため、消防団の SNS で、被災状況を知りました。帰宅しようと思いましたが、高速バスが動かず、その日は戻れなかったそうです。東林田地区は、水害で川の流れが変わり、地区が分断される形になりました。3 軒ぐらいの家が流されたそうです。130 世帯あった東林田地区でしたが、2019 年現在、83 世帯。仮設住宅やみなし仮設から戻ってきた方は高齢者が多く、若い世代は戻ってきていないとのことでした。

若い世代だからできることを

塚原さんは、それまではボランティアの経験などはありませんでした。しかし、水害の後、若い世代が戻ってこない現状を目の当たりにし、「なんとかしなければ」という想いが強くなり、福岡市の会社を辞め、現在地元朝倉市の職員になっています。そして 2 人の後輩とともに、「東林田ラバーズ」を結成しました。それから一人ずつ声をかけ、現在は 23 歳〜41 歳の 13 名（2019 年現在）。県外に住んでいるメンバーもいるそうです。活動の目的は、東林田地区の再生に若い世代の考えを反映させ、若い世代が帰ってきたいと思う「まちづくり」をすること。そのために、東林田ラバーズで出た意見を、地区の復興委員会に伝えています。復興委員会の方々も、塚原さんたちの意見をしっかり傾聴してくださるそうです。地域の方々と塚原さんがとても良い関係性を築いていることが伝わり、お話を聞きながら嬉しくなりました。

団体名に込められた想いを形に

東林田ラバーズ（Lover's）の「'」は、「東林田を愛する者たちの集まり」と「東林田は、ここを愛する者たちのもの（場所）」という 2 つの意味を持たせる大切な「'」なのだそうです。「繋がりを創ること」と「そのための場を創ること」という、活動の二本柱を表している素敵なネーミングです。

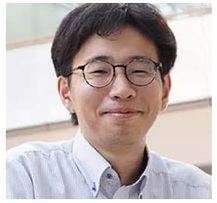
2018 年には "東林田未来会議" を 2 回開き、航空写真を見ながら「ここにこんなものがあったらいいな」と話し合う場を設けました。公園、桜並木など、いろいろなアイデアが出ました。「東林田を未来の世代に繋いでいきたい」という想いをハード面での形にしていくことが、ひとつの目標です。

ソフト面においても、「鬼火焚き」「おくんちへの参加」「グラウンドゴルフ大会」などの行事を復活させ、希薄になりつつあった繋がりを深めたいと考えています。2019 年の「7.5」の追悼行事では「紙灯篭」づくりを行い、地域の方々や朝倉東高校を巻き込んでいくきっかけとしました。

塚原さんは「復興活動をきっかけに、地域と深く関わることができました。これからも地域の "縁の下の力持ち" として活動していきたい」と語ります。地域にとって、塚原さんたちのような実行力のある若者がいることは、素晴らしい財産です。

私たちができること
仲間づくりを進め、若い世代が気軽に繋がれるようにハード面を整備し、イベント等を企画する。

私たちがのぞむこと
東林田地区に住む若い世代がもっと増えてほしい。空き家や空きスペースを活用してコ・ワーキングスペースを作り、仕事と農作業を両方体験できるようなライフスタイルも提案したい。



塚原 健児 つかはら けんじ
1985 年 杷木生まれ、杷木育ち。。災害当時 WEB デザインを学びながら、福岡市で IT 関係の仕事に就いていた。現在は朝倉市嘱託職員。商工観光課在籍。

東林田ラバーズ (Lover's)
東林田地区のまちづくりを行う団体
[E-mail] asakuranotetsujin@gmail.com
[Web] https://www.facebook.com/HigashihayashidaLovers/

木のいのち 森の再生
被災木でつくる板倉構法の安全基地

杉岡製材所、SUGITALO 代表　杉岡 世邦さん


撮影：斎藤さだむ





祖父の森、木のいのち

杉岡さんは、三代続く製材所を営む現代の木挽（こびき）であり林業家です。先々代から受け継いだ朝倉市杷木松末にある山が被災されました。お祖父様は、昭和 28 年の筑後川大洪水で被災した後、この山の木を活かして自宅を造り、山の再生を願って植林しました。杉岡さんは幼い頃からお祖父様に連れられて、その山のひと際大きな老杉に、尺を回しては太さを墨書したそうです。お祖父様が他界されてから、命日には山へ行き、その老杉に日本酒をかけ、手を合わせていました。

今回の災害後、思い出のつまったその杉を探し求めましたが、跡形もありません。老杉のすぐ側を流れていた小川は、幅数 10 メートルの谷へと姿を変えていたのです。杉岡さんは心底落胆しつつも、あることに気づきました。流されたのは谷筋の２列程度。むしろ端の樹々は流木をせきとめていました。「この山の木は、将来私が家を建てる時のためにと、祖父が育ててくれたものだ」そう考え、被災した杉のいのちを、建築の材として再生させるプロジェクトを発想されたのです。

杉に対するイメージと感情

災害による土砂量は約 1,065 万㎥、流木は約 21 万㎥。しかし、真砂土災害をもたらした主犯は甚大な雨水や土砂ではなく、まるで流木であるかのようにメディアで語られました。「昭和 28 年、筑後川をはじめ日本中で起こった大洪水の時は、伐り尽くされて荒廃した山々を憎み、国中一斉に杉・檜を植えた。ところが平成 29 年九州北部豪雨においては、針葉樹で覆われた森林を憎々しく思っている」

災害後に蔓延したこの「杉に対するネガティブなイメージ」は、杉岡さんを苦しめました。本来、流木が発生する表層崩壊は樹の根の生息域より深い層で起こるため、針葉樹、広葉樹の差はほとんどありません。災害に強い森にするには、森林の機能に限界があるということを知りながら、適切な森づくり・林業を継続することが必要なのです。

杉岡さんは適切な林業を支えるために、杉材をふんだんに使用する「板倉構法」が有望であると考えました。板倉構法とは、日本古来の神社や穀物倉庫に見られる板倉を応用発展させた杉のシェルターともいえる木造建築技術です。

前年の熊本震災の際、板倉（西原習合堂）を通して復興支援を行った経験から、杉岡さんには「杉を使うこと」が森と暮らしの循環を生み出すという気づきがありました。

「私がやるべきことは、人がわくわくするような杉活用案の “創造” ではないか」豪雨災害後の「杉に対するネガティブな感情をポジティブなものへと転換する」ために、杉岡さんは被災木を活用し、板倉構法で二次拠点（安全基地）等を建てるという建築活動「SUGITALO」を始めました。

今後の日本には温暖化型豪雨と呼ばれる気象災害が増えると予測されています。だからこそ、適切な森づくり・林業を持続していくことが重要なのです。

我々が受け継いだ「木の文化」を、次世代のためにどう活かすのか。この「人間と自然の関係」への重要な提言は、杉岡さんの優れた知力・行動力のみならず、先祖からつながる「森への真心」がなせるものなのです。

私たちができること
令和２年、杉岡製材所敷地内に建てられた方丈板倉 斎（さい）は、ちいさな集まりなどの場として使用できる。

私たちがのぞむこと
板倉構法の知識共有。森の未来について共に考えること。



杉岡 世邦　すぎおか としくに
凸版印刷（株）に５年勤務後、家業を継ぐ。三代目。住宅・社寺・文化財等の木材を請け負う。西日本新聞にて『木挽棟梁のモノサシ（15 回）』『住まいのモノサシ（42 回）』を連載し、木の魅力を発信した。九州大学大学院芸術工学府博士後期課程在学中。九州大学非常勤講師、福岡大学非常勤講師。日本茅葺き文化協会理事、日本板倉建築協会理事。

（有）杉岡製材所
［住所］福岡県朝倉市杷木久喜宮888
［電話番号］ 0946-23-8088
［Web］ http://www.sugiokatoshikuni.com/

議事録をかわら版にして発行
情報を共有するというボランティア

松末復興かわら版 編集チーム 小川 進さん 一瀬 徹夫さん









東日本大震災からの教訓を活かす

小川さんは、宮城県で公立高校教諭をしていましたが、2011 年 3 月 11 日の津波で被災し、2017 年まで仮設住宅に居住されました。震災後巨大な防潮堤が次々に計画されていき、住民と行政との折衝が各地で始まりました。小川さんは地元の防潮堤が住民合意を得るまでの過程を高校生として「自分たちの目で見て・聞いて・考える」事が必要だと感じ、教え子を中心にこの学習活動を 2016 年まで行いました（高校生の会の活動は QR コード参照）。

この活動を小川さんの母校同窓会が募った「被災地の高校生を支援する基金」が支援し、その窓口をしていた一瀬さんと出会いました。その後、お二人は共に支援活動をするようになりました。

東北の被災地が落ち着いたころ、宮城県にいた小川さんは、豪雨によって朝倉市松末（ますえ）の生家が倒壊したことを知ります。発災直後に福岡県にもどり、生家の被害状況を確認しました。8 月に松末地域コミュニティー協議会会長と今後について相談し、一瀬さんと共に支援活動を始めます。9 月 24 日に杷木中学校体育館で行われた復旧説明会の議事録を「松末復興かわら版 1 号」として発行。その後発行を継続しました。

「東日本大震災に関する住民と行政との折衝を高校生と見守った経験から、①議事録の必要性②地域住民への周知③専門家の適切なアドバイスが不可欠であることを痛感し、この活動が生まれました」と小川さんは語ります。議事録そのものの公開は難しかったため、かわら版形式として住民に配布されました。このかわら版形式にすることで、見出しや箱組みとして整理でき、議事録よりも住民にわかりやすくなりました。また発行前に行政にも訂正をお願いしているので、準公式記録になるとお二人は考えています。

地域と行政の建設的な話し合いのために

災害復興に限らず、行政との折衝のプロセスは地域住民に見えにくく、長期化する場合があります。お二人は、これらの弊害を少なくするために「話し合いの結果を広く住民全体に周知すること」を目標としてかわら版の発行を行っています。

「高校生の会」活動記録の QR コード→

議事録を紙面化するという復興支援

災害復興計画は、早く進めたい行政側と、より良い形を求めたい住民側との駆け引きの連続です。しかし、その場に全住民が出席できる訳ではありません。折衝は住民への公開を前提に行われるべきで、その橋渡しとなるのが「議事録かわら版」です。「紙面として公にすることで発言に責任が生じ公正性が保たれる」とお二人は考えています。また、このボランティア活動は、録音データと会議資料があれば遠隔地にいても支援できる活動形式であり、久留米大学の学生ボランティアや一般災害支援団体が手伝ってくれたこともあります。小川さんと一瀬さんの実直な活動は、情報を共有するための新しい復興支援のあり方と、その可能性を示してくれます。

私たちができること
住民と行政との折衝の記録を、広報誌（かわら版）として公開し広く共有すること。

私たちがのぞむこと
これからも災害に伴う住民と行政の折衝の際は、その内容を常に公にし、開かれた復興議論を行なってほしい。それによって住民の心を地域に繋ぎとめられると信じている。どの被災地でも次の世代に故郷を残せる形で復興してほしい。



小川 進 おがわ すすむ（写真左）
朝倉市杷木松末生まれ。法人代表。
宮城県立高校教諭として在職中、東日本大震災で被災し、仮設住宅に 6 年間居住。九州北部豪雨で生家が被災したことから、行政と地域の橋渡しのために松末復興かわら版編集チームを一瀬さんと結成。

一瀬 徹夫 いちのせ てつお（写真右）
朝倉市甘木生まれ。朝倉市社会教育委員として地域活動に貢献。小川さんとは高校の先輩にあたり、東日本大震災から共に災害復興支援に関わる。

松末復興かわら版編集チーム
［E-mail］masue.asakura@gmail.com
［Web］https://tamarukai.web.fc2.com/（バックナンバー）

子どもとともに 自然とともに
100年後の子どもに誇れる故郷を

あさ・くる 代表　松本 亜樹 さん







自然の中で回復していく力

朝倉がご出身（現在は糸島在住）という松本さん。災害当時は、故郷の見慣れた景色が一変した姿に衝撃を受けつつ、「何かできることを」と模索します。発災時、朝倉市杷木志波で PTA 会長をしていた同窓生と連絡を取るうちに、学校が立ち入り禁止となり、夏休みの楽しみもすべてキャンセルとなった子どもたちのことを知りました。そこで、被災地の子どもたちに「糸島の海へあそびにおいで」と呼び掛けたのが「こども自然スコーレ」のはじまりでした。糸島の海で、解き放たれたかのようにはしゃぐ被災地の子どもたちの姿。松本さんは、「人間は、自然の中でこそ回復していく力を養えるのかもしれない」という気づきを得ました。こうしてこの活動は、2017 年の冬、地元の賛同者とともに、子どもたちをエンパワーメントする活動「あさ・くる」へと展開していきました。

変化に耐えうる普遍性を、子どもとともに

2018年 4月より廃校となった志波小学校。地域から子どもの声が消えるということは、数値化できない余波を地域に与える、と直感した松本さんたちは、月に1度でも子どもたちが集う場を作ろうと、「こども自然スコーレ」をはじめました。

小学校 1 年から 6 年まで 28 名の子どもたちが集まり、自然活動を中心としたワークで遊び、感じ、想像 & 創造することを重ねていく中で、不安が安心に変わり、相互の間に生まれる信頼が関係性を成長させていく姿を見ることができたそうです。子どもたちの変容は、単に個人の成長だけではなく、地域のエンパワーメントへとつながります。

「子どもたちは、“あたりまえ” と思っていた日常が、ある日突然一変するという経験を経ています。だからこそ、社会や環境のいかなる変化にも耐えうる “普遍性” を、彼らとともに探っていきたいのです」という松本さんの言葉が印象的でした。

第三の居場所づくりを

「復興」とは、単に災害前の姿に戻すことではなく、災害を通して見えてきた課題に対して、人間に内在する自然性や感性、そして、文化や知恵や記憶をよみがえらせながら、創造的に働きかけていくプロセスです。

今後も、地域コミュニティ再生の中心核に「子ども」と「自然」を置きつつ、ゆくゆくは「家庭でも学校でもない第 3 の居場所」がコミュニティの中に常在し、そこをハブとしながら、多世代が交流できるような地域拠点へと発展させていきたい、と松本さんは考えています。

現在も、毎月 1 度、旧志波小学校には、子どもたちの笑い声が響いています。あさ・くるは、「子どもたちが大きくなった時の地域」を想定した貴重な活動です。そして、被災地に、未来の可能性を創造するという「希望」を与えてくれるのです。

私たちができること

現場経験豊富なスタッフがおり、サバイバルスキルや自然活動に関するノウハウの提供が可能。地域の祭りなどで子どもひろばを開設し、子どもワークショップを開くことができる。

私たちがのぞむこと

子どもに関わる個人や団体、学校や教育委員会とのネットワーキング。



松本 亜樹　まつもと あき

福岡教育大学卒業後、青年海外協力隊で中国へ。帰国後、JICA 国際協力推進員として、㈶福岡国際交流協会に勤務し、国際理解教育の推進、NPO/NGO 団体とのネットワーキングや国際協力啓発のイベント企画などを行う。「子どもの権利」をベースとした開発教育に携わる。

あさ・くる

地域コミュニティ再生のための、子どもの表現・あそび場「こども自然スコーレ」の開催や、自然との関係性を紡ぎ直すワークショップを開催。

［住所］福岡県朝倉市杷木志波2040-2
［電話番号］090-5477-0322
［E-mail］asakuru2017@yahoo.co.jp
［Web］https://asakuru2017.wixsite.com/asakuru

住民ディレクターが創るコミュニティ
地域全体の“相似形”となるテレビ局

東峰テレビ　総合プロデューサー 岸本 晃 さん







民放にいた頃の話

岸本さんは、元民放報道制作局で記者、編集、ディレクションなど幅広く手掛け、活躍されていた方です。テレビ局では、番組づくりを通して様々な人と関わります。しかし、その繋がりが一過性のものになってしまうことに、岸本さんは違和感がありました。そこで岸本さんは、地域にオープンなテレビづくりを目指そうと、2010 年、福岡県東峰村に住民主体のケーブル放送メディア「東峰テレビ」を創設しました。

住民ディレクターという考え方

岸本さんは、テレビには「全体を見える化する力」があると言います。例えば地域づくりをするときに、コンサルタントの言うことに従ってもそれは地域の人の内発的なものではないので､アイデンティティがない「借り物」になってしまいます。そこで自分たちの地域のことを自分たちが表現する「住民ディレクター」を提案しました。地域住民の方が自ら企画を立て、それを企画書に起こし、撮影･編集し、ひとつの番組を作るのです。その企画・実行力が地域づくりに役立ち、さらに新たな気づきが生まれるきっかけにもなります。音響機材を操作したり、タイムキーパーをしたりと、番組の創り手の視点に立つと、視聴者はこちらの想像と違う受け取り方をすることがあることや、こちらの頭の中にあったものと違う見方が存在することに気づきます。これらの番組づくりを通した気づきによってコミュニケーションが進化していくと岸本さんは考えています。創造し、視聴するという双方向のコミュニケーションが、地域の意識を進化させ行動に反映されるという「情報の循環」を生み出すのです。

災害発生当時

豪雨災害の当日、岸本さんは出張で東京にいました。東峰テレビ局の方も避難したという連絡があり、翌日急いで帰られたそうです。災害の対応に追われる役場は混乱しており、情報を把握できないと感じた岸本さんは、ご自分の足で周辺地域を何日も歩いてまわられます。そして、現場の様子を随時撮影しました。テレビのケーブルが断線していたため、その映像は、災害翌日から毎日SNSによって発信したそうです。

カメラを持って地域の被害の様子を撮りに行くと、どこに行っても、お年寄りの方を中心に皆が協力し助け合っていたそうです。災害は痛ましい出来事でしたが、東峰村の地域コミュニティとしての良い面が発揮され、同時にそれが証明できたことはよかったといいます。

全体の中の自分の位置

災害発生から間もない時は、どこへ行っても「自分のところは被害がひどく大変だから助けてほしい」と、自分のことで精一杯という方が多かったそうです。しかしケーブルが復旧し、テレビを通じて周りの状況を把握できるようになってからは、「自分のところはいいから、もっと被害のひどいところへ行ってあげてほしい」という言葉に変わりました。映像によって全体の中の自分の位置が分かるようになったのです。ひとつのテレビ番組が地域全体の「相似形」となりコミュニティを進化させていったのです。「他者の現実を知ることは、ものの見方を多角的にし、世界の中での自分の位置を客観的に知ることに役立ちます」と岸本さんは語ります。東峰テレビは、住民一人ひとりが社会創造する可能性を開きました。そして、これが東峰村に力強い復興感を共創する原動力となっているのです。

私たちができること
東峰村の地域外の人でも、自作の動画を送ってもらったら番組で取り上げることができる。

私たちがのぞむこと
様々な分野の地域デザイナーの力がほしい。東峰村をフィールドとしたデザイン提案をしてほしい。



岸本 晃 きしもと あきら
東峰テレビ 総合プロデューサー。株式会社プリズム代表取締役。熊本の民間放送局で約13年間勤務。記者、編集、ディレクションなど幅広く手掛け、活躍した。1996年にメディアによる地域活性化策を掲げ独立、2010 年に東峰村のケーブル放送メディア「東峰テレビ」を創設する。

東峰テレビ
［住所］福岡県朝倉郡東峰村大字宝珠山166-1
［電話番号］0946-23-9107
［E-mail］prism.k@nifty.com
［Facebook］https://facebook.com/akira.kishimoto1
［Web］https://www.tohotv.jp

子どもたちの将来と地域産業づくり
英彦山を中心としたコミュニティのデザイン

英彦山 地域デザインLLP 代表 加藤 憲司 さん　事務局長 川畑 裕己 さん







子どもの保護者として地域を考える

英彦山（ひこさん）地域デザインLLP代表の加藤さん、事務局長の川畑さんは、もともと添田町立落合小学校 PTA の保護者仲間でした。町では小学校統廃合が議論され、地域コミュニティの衰退が危惧される中、地域復興のために何か行動できないかと考え、災害前の 2016 年に団体を発足しました。建築・Web デザインという専門に加え、子どもたちの保護者でもあるという立場から、将来の英彦山地域のビジョンを見すえた産業づくりを目指して活動しています。少子高齢化が進み、今の子どもたちが大きくなった時、この地域に住み続けられるように、そして英彦山地域の歴史文化や風土を残していけるように、今のうちから地域の産業づくりをしようということが目標です。加藤さんらは「しっかりと家族を養い、豊かに暮らしながら、自らすすんで楽しく地域活動をする姿を、子どもたちに見せることが大切なのです」と語ります。英彦山は三大修験山のひとつであり、山伏たちが木や水を大切にしてきたところです。災害後、加藤さんらは、生活の木質化を目指し、木に関する仕事を集めた「木もくまつり in 英彦山」に協力しています。

目標をあえて定めない

「いつも会話が前向きで、活動が楽しいことが英彦山 地域デザイン LLP の特徴です」と加藤さんはいいます。さらに、「年内に〇〇を達成する」というような堅苦しい具体的な目標は定めていないそうです。ホスピタリティ（もてなす心）を持って、できる範囲でのびのびと活動することが楽しい活動環境を生み、周囲を自然にまきこむ力となっています。

地域の核になる英彦山ネット

英彦山 地域デザイン LLP が運営する地域の総合情報サイト「英彦山ネット」では、最新のイベント情報や、地域周辺のお店や施設、団体の紹介などがされています。Web デザイナーでもある川畑さんは、ホームページはキャラクターや会社のロゴマークなどと似ていて、「象徴的」であると考えています。「英彦山地域周辺には精力的に活動している団体がいくつもありますが、それぞれの力が分散してしまっているように感じます。そこに英彦山ネットがひとつの象徴として存在し、英彦山周辺地域の団体の活動や、団体のサイト情報をまとめることで、分散した力を一つに集中させることができるのではないかと思っています」と、ネットの力を使って人と人とがつながるような、コミュニティの核になるようなホームページを考えられています。

コミュニティをデザインする

建築・Web デザインというお二人それぞれの専門分野には「デザイン」という共通するキーワードがありますが、それは形のデザインではなく「コミュニティのデザイン」なのだそうです。発端であった「柚子こしょうヌーボー」の商品開発によってメディアからの関心を集めることができました。他にも「英彦山参道駆け上がり大会」「山伏の里探訪」などのイベントに協力し、地域を盛り上げています。英彦山ネットが地域をつなぐ。コミュニティをデザインすることが子供たちと英彦山の将来につながるのです。

私たちができること

民泊体験や「英彦山参道駆け上がり大会」など様々なイベント企画・実行。「英彦山ネット」や「英彦山情報コミュニティ」（Facebook）で英彦山地域の情報を発信する。

私たちがのぞむこと

英彦山地域のイベントに参加してほしい。参加することで、少しでも英彦山のことを好きになってもらいたい。また、イベントの情報や、参加の様子をSNSなどで情報発信をしてほしい。



加藤 憲司 かとう けんじ（写真左）
英彦山 地域デザイン LLP 代表。
設計事務所を営む。

川畑 裕己 かわばた ゆうき（写真右）
英彦山 地域デザイン LLP 事務局長。
Web デザイナー。

英彦山 地域デザインLLP
［住所］福岡県田川郡添田町落合3152-5
［電話番号］0947-31-4696
［E-mail］info@hikosan.net
［Facebook］https://www.facebook.com/sukisukihikosan
［Web］https://hikosan.net

九州大学の研究者50人が結集 “知”の連携による復興支援

九州大学災害復興支援団長　三谷 泰浩さん







知を横断するチームづくり

九州大学では九州北部豪雨災害を受けて、発災の20日後に「九州大学平成29年7月九州北部豪雨災害調査･復旧･復興支援団（現･九州大学災害復興支援団）」を結成しました。メンバーは、工学研究院、農学研究院、決断科学センター、医学研究院、歯学研究院、芸術工学研究院、人間環境学研究院、基幹教育院の教員ら50名で構成されています。九州大学でこのような分野横断的な組織が結成されたのは初めてのことでした。

団長の三谷泰浩教授は、地圏環境工学、岩盤工学、空間情報学がご専門です。三谷先生は「総合防災」という観点から、前年の熊本地震の教訓を活かし、大学内の横のつながりをどうやって作っていくかを考えて組織を立ち上げました。

支援団の目的について「大学の英知を結集して災害の復旧から復興に渡る長いスパンの中で果たすべき役割を総合的にとらえて、地域とともに、将来起こりうる災害に対して対処する方法を学の立場から提案していくこと」としています。

70回以上の住民会議

豪雨発生直後は、発生メカニズム調査、避難所運営の支援、被災者の心のケアなどに取り組み、2か月後から復旧・復興の方向性や対応策について議論する「住民会議」に参加しました。参加した会議の数は70回以上に及びます。住民参加の研究報告会も複数開催し、自治体の垣根をこえたシンポジウム開催を実現しました（朝倉市、東峰村、九州大学主催）。情報と意識を共有・深化させる地域連携づくりに貢献しています。

三谷先生は特に行政と住民との考えのギャップを埋めて方向性を探ることに専念し、住民側に寄り添うという姿勢を徹底されました。持続的な活動計画（人や資金）、および行政との折り合いをつけることにはご苦労があったそうです。

災害伝承のために

被災経験を教訓として次の世代に伝えたいという地域の声をうけ、クラウドファンディングを活用し、災害を風化させないための「東峰村災害伝承館」（2018年11月～）を設立しました。「災害は忘れられるものであるため、これをどのように次の世代に伝えていくかという考えから活動している」とのことです。

また「災害リスクコミュニケーション」として地域における発災後のタイムライン制作等を行い、住民との一体感・つながりを深めています。今後は、NPOなどを活用した持続的な活動を計画中です。

現場から考える

現場に何度も足を運び、住民と討議し、地域に根付いた復旧復興のマスタープランを創りあげるという三谷先生の被災地支援のスタンスは、「大学知」による社会貢献のあるべき姿のひとつとして、学生のみならず教員にも大きな影響を与えました。また、平素より分野を横断して研究者が連携することこそが、大規模災害後のよりよい復旧復興計画づくりに貢献することを示してくれたのです。

私たちができること
長いスパンの中で、災害リスクへの対処方法を学の立場から提案する。

私たちがのぞむこと
ボランティアとしての運営への協力。情報提供。人的交流。



三谷 泰浩 みたに やすひろ
九州大学大学院工学研究院 附属アジア防災研究センター教授、博士（工学）
地盤工学、地圏環境工学、空間情報学などの知識・技術をベースに官民と協力しながら取り組んでいる。

国立大学法人 九州大学
［住所］福岡県福岡市西区元岡744
［電話番号］092-802-3399
［E-mail］mitani@doc.kyushu-u.ac.jp
［Web］https://www.facebook.com/QdaiDSN/

“おきあがりこぼし”で広がる表現の輪
デザインを産業につなげて地域活性化

朝倉復興支援あさくら杉おきあがりこぼし展 代表 尾方 義人さん





流木被害からの発想

尾方先生は、プロダクトデザインがご専門です。九州大学災害復興支援団の一員として災害直後から被災地に足を運び、大量の流木による被害を目の当たりにし、「これらの災害流木をデザインの力で被災地応援に結びつけたい」と考えました。被災木を「山、森、杉、川について考える機会を与えてくれるもの」として再生させることを目指し、「何度でも立ち上がる」という復興のイメージから、朝倉産木材（あさくら杉）による「おきあがりこぼし」等を発案し、朝倉市を支援しています。

表現のネットワーク

尾方研究室では、被災木というネガティブなものを、被災地を応援する製品というポジティブなものに変えるためのプロジェクトを行いました。この成果を「あさくら杉と21のプロダクト展」で発表します。その後、（株）トポスデザインの東徹太郎氏ら社会人の専門家とともに「あさくら杉おきあがりこぼし」プロジェクトを始動します。アーティスト達におきあがりこぼしの原型を配布し、着色など多様な表現を試みてもらうというものです。このよびかけに150人以上の作家による約500個の個性的な作品が集まりました。複数の展示会において作品を販売し、売り上げの約130万円を朝倉市に寄付することができました。朝倉災害復興支援あさくら杉おきあがりこぼし展実行委員会の運営は、実行委員会及び学生委員・作家委員により構成されています。もともとのアイデアや設計を行ったメンバーを中心に学生委員会が構成され、運営を主体的に行っています。これらの活動は、社会的意義が高く評価され、第20回福岡デザインアワード金賞を受賞しています。

あさくら杉のブランド化

デザインを地域産業に結びつける活動も積極的に行っています。朝倉で伝統的に行われている鵜飼い（うかい）をモチーフに制作された「鵜のおきあがりこぼし」もその一環です。これは製品化され、「朝倉市ふるさと応援寄附金」「筑紫野市ふるさと応援寄附金」における返礼品として採択されています。

尾方先生の活動の基本設計は、朝倉の木材資源を活用し（地域資源の活用・林業の活性化）、朝倉の魅力を伝える製品を（地域ブランド・新しい産業）、朝倉の企業や人々によって（地域活性化）、朝倉という場所で製造する（産業の活性化・雇用の創出）という仕組みで持続的な支援を実現するというものです。

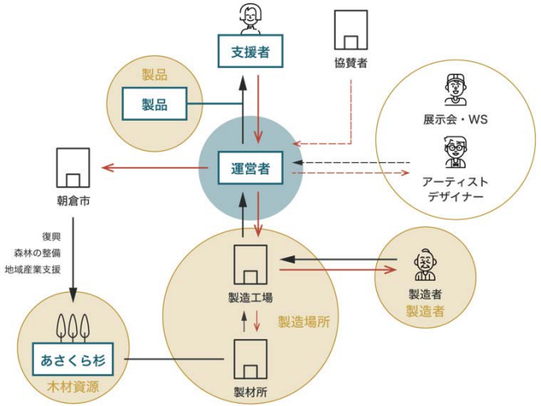
この活動の素晴らしいところは、表現活動によって支援の輪を広げ、さらに産業につなげることで地域を活性化する点です。被災者にとって生活再建の問題は重要です。森林資源を活用して新しい産業をおこすことは、経済面はもちろん、防災の面でも極めて重要なことなのです。

私たちができること

おきあがりこぼし以外のアロマオイルなど杉の他商品への利活用。おきあがりこぼしを朝倉市出生者プレゼント（ファーストトイ）＋出生届デザインなどを企画中。

私たちがのぞむこと

人材と資金の確保。特に運営のコアになる活動人材の育成。今後も意見交換や情報交換など継続しながら、柔らかな関係で各団体と連携していきたい。





尾方 義人 おがた よしと

九州大学大学院芸術工学研究院 応用生理人類学研究センター准教授、博士（工学）
工業デザインやレジリエンスデザインのデザイン実務を通したデザイン学研究を行っている。

国立大学法人 九州大学（芸術工学研究院）

［住所］福岡県福岡市南区塩原4-9-1
［電話番号］092-553-4400
［E-mail］ogata@design.kyushu-u.ac.jp
［Web］https://ja-jp.facebook.com/asakuraokiagarikoboshi/

被災木をアートの力で再生
未来への祈りを形にする

流木再生プロジェクト（彫刻）代表 知足 美加子（本冊子監修担当）





流木からアートを

私は「九州大学災害復興支援団」の一員として発災直後の被災地に入り、その景観の変容に衝撃を受けました。一晩中続く濁流の鳴動の中、被災者の方々が味わった恐怖は察するに余り有ります。「昨日とつながらない今日」を生きる被災者の方々の生活基盤の復旧とともに、「心の復興感（レジリエンス）」が必要であると考えました。特に、子どもたちの「自然」に対する負の感情を少しでも軽減するために、被災木からアートを創造する「流木再生プロジェクト」に取り組みました。子供たちが地域を好きでいてくれることが、未来をつなぐと考えたからです。

まず、杉の香りと手触りを楽しみながら読書してほしいと、閉校になる朝倉市の小学校（松末、久喜宮、志波）の児童一人ひとりに、校名と校章を刻んだ「流木のしおり」を贈りました。知足研究室の学生達も、それぞれがデザインした流木しおりを販売し、義援金とする活動を行いました。また、

松末小学校において、災害倒木と校庭の小石を使って「時計作りワークショップ」を行いました。子供たちの手の中で、木が愛されるものとして生まれ変わり、新しい時を刻んでほしいと願いました。

次に、彫刻家である私は、樹齢 132 年の樟（くす）の流木から「水の守り神」としての龍の彫刻《朝倉龍》(2018) を制作しました。これは現在、統廃合後に新設された杷木小学校に設置されています。子供たちが、「この龍がいるから、もう災害が起こらないような気がする」と言ってくれたことは、本当に嬉しいことでした。

翌年、倒木した樹齢 300 年の天然記念物「吉木のヤマザクラ」（添田町）と朝倉流木をつかって、《花開童子と福太郎童子》(2019) を制作しました。災害後から不通になっている JR 日田彦山線の開通祈願として、修験道の山である英彦山の守護童子を題材にしました。記憶の継承とともに、くりかえす自然の営みへの「祈り」を込めています。さらに、「意識継続」および「地域連携」を促すために、復興ガーデン（p.5）やこの小冊子を企画しています。

英彦山分水嶺と芸術文化

今回の豪雨災害は、英彦山南西部一帯（朝倉市、東峰村、添田町、日田市）の水系で起こりました。自然を崇敬してきた英彦山山伏の子孫である私は、言いようのない痛みを感じていました。ふりかえると私の活動はすべて、この痛みから発しているのだと思います。倒れた木のいのちを何かに活かしたいと願う心は、英彦山に限らず、森林と共に暮らしてきた我々の根底にあるものです。これからも、木や水などの自然を地域の文化資源ととらえ、芸術文化と復興をつないでいこうと考えています。





私たちができること

朝倉市黒川における「共星の里」の復興ガーデンプロジェクト（土壌改良と蜜源になる植栽等）によって、人々が癒される場づくりをすすめている。

私たちがのぞむこと

本冊子を契機に、復興支援団体同士の連携や、地域内外の支え合いがひろがってほしい。



知足 美加子 ともたり みかこ

九州大学大学院 芸術工学研究院教授

博士（芸術学）。彫刻家（国画会会員）。山岳修験道学会評議員（英彦山山伏「知足院」の子孫）。

筑波大学院芸術研究科（彫塑）修了。平成 2 年度青年海外協力隊（コスタリカ）。中越地震、東日本大震災、熊本震災、九州北部豪雨災害において、アートを通した復興支援活動を行う。復興支援「福岡エルフの木」「英彦山文化財復元プロジェクト」他。

国立大学法人九州大学
（芸術工学研究院）

［住所］福岡県福岡市南区塩原4-9-1
［電話番号］092-553-4400
［E-mail］tomotari@design.kyushu-u.ac.jp
［Web］http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/



ワークショップ / 黒川復興ガーデンとバイオアート（2019.9.12）
撮影：藤木秀一

九州北部豪雨災害 復興支援団体小冊子 “かたり” 編集部（所属・役職・学年表記は初版発行時のもの）

知足 美加子	九州大学大学院芸術工学研究院 教授［本冊子監修担当 p5－8、p33、p35、p43、p45、p47 執筆担当］
白水 祐樹	九州大学大学院芸術工学研究院テクニカルスタッフ［マネージメント p 15、p17、p29 執筆担当］
川口 理恵	アグリガーデンスクール & アカデミー福岡朝倉校スタッフ［p27、p31 執筆担当］
永松 美和	元バレエ講師［p 19、p21 執筆担当］
松本 亜樹	いとしま菜の花プロジェクト / あさ・くる代表［p9、p37 執筆担当］
師岡 知弘	高木薪づくりプロジェクト / 黒川みらい会議代表
伊藤 洋子	神楽舞手
密岡 稜大	九州大学大学院芸術工学府修士 1 年［取材書記 p23、p25、p39、p41 執筆担当］
町野 陽子	九州大学芸術工学部 4 年［p11、p13 執筆担当］
永松 京	西南学院大学文学部 3 年［p19、p21 執筆補助］

取材補助

藤原 旅人	九州大学大学院芸術工学研究院テクニカルスタッフ	逆瀬川 陽介	九州大学芸術工学部 3 年
鄒薛 松武	九州大学大学院芸術工学府修士 2 年	嘉松 峻矢	九州大学芸術工学部 3 年
田中 圭太郎	九州大学大学院芸術工学府修士 1 年	土井 康平	九州大学芸術工学部 3 年
口羽 雅晴	九州大学芸術工学部 3 年	山中 りり花	九州大学芸術工学部 3 年

九州北部豪雨災害 復興支援団体紹介小冊子 “かたり” 改訂版

発行日 ——— 2021 年 2 月（初版発行：2019 年 9 月）
編 ——— 九州北部豪雨災害 復興支援団体小冊子 “かたり” 編集部
執筆 ——— 知足 美加子、白水 祐樹、川口 理恵、永松 美和、松本 亜樹、密岡 稜大、町野 陽子、永松 京
監修 ——— 知足 美加子
デザイン・写真（一部） —— 田中 里佳
後援（初版発行時） ——— 日本アートマネジメント学会九州部会、九州大学災害復興支援団、朝倉市、東峰村、添田町
助成 ——— 令和 2 年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

発行 ——— 九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ
〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/

＊本小冊子の PDF 版は、以下の URL よりダウンロードできます。
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/pdf/2019katari.pdf